

## 17世紀末、清朝の対モンゴル政策

—— 康熙帝の五台山改革を中心に ——

新 藤 篤 史

### はじめに

17世紀末、清朝と西モンゴル・ジュンガルとの間で紛争が勃発した。同時期、康熙帝は五台山の改革に着手する。ジュンガルとの戦いに代表される「清朝の対モンゴル政策」と、康熙帝の五台山改革にはどのような関係があった。

清朝は、1636年から1912年までの間、ユーラシア東部に君臨した帝国である。その前身は、現在の中国東北部で誕生した満洲人の一地方政権であり、当時の指導者ホンタイジが、現在の遼寧省瀋陽でモンゴル人および高麗系漢人等によって皇帝に推挙され、国号を大清とし、さらに1644年、順治帝の時代に北京を占拠、中国を支配した。

清朝が大帝国として発展を遂げたのは、1661年に即位した康熙帝の時代である。康熙帝の主な成果としては、まず1681年の三藩の乱の鎮圧、1683年の台湾の征圧等があげられる。これらによって中国内部の反乱分子は退けられ、さらに1689年のネルチンスク条約によってロシア人を黒龍江（アムール河）から閉め出し、国内を安定させた。

同時期の1680、90年代、康熙帝は対モンゴル政策を本格化させた。まず1686年のクレーンベルチルの会盟で、現モンゴル国の全域にあたるハルハ部の内乱を調停し、1690年には内モンゴルに侵攻してきたジュンガルとウランプトンで戦った。そして、1691年のドローン・ノールの会盟でハルハ部を帰属させると、1696年からのジュンガルとの戦いにおいては康熙帝自ら陣頭指揮をとり、3回の親征を行った。ジュンガルとの戦いは、その後も70年に亘って繰り返され、康熙帝の2代後の乾隆帝の時代になってジュンガルは滅亡、その時をもっていわゆる清朝の領土は最大となっていく。

つまり、康熙帝の時代より始まった対モンゴル政策の成功によって、清朝

の領土は最大になったのであり、従って対モンゴル政策が本格的に始まった17世紀末は、清朝の全貌を把握するうえでもきわめて重要な時期であったと考えられる。康熙帝による五台山の改革は、そうした「清朝の対モンゴル政策」が本格化する17世紀末に実施されたのである。

五台山は、現在の中国山西省東北部の五台县にあり、古くから文殊菩薩の住む「清涼山」として多くの仏教信者によって信仰されてきた。その名が示す通り、主に5つの峰を有し、それぞれ東台、西台、南台、北台、中台と称され、さらにそれらの峰に囲まれた盆地のような場所は台懷鎮と称され、そこは一つの街のような様相を呈していた。五台山に属する寺院の総数は、古くは300余り、近世ではおよそ100寺といわれている。満洲人も、モンゴル人も、清朝の時代はいずれも敬虔なチベット仏教信者であり、康熙帝が対モンゴル政策を本格化させた時期に五台山の改革を実施している点は注目すべきかと思われる。

先行研究としては、清朝を一中華王朝からユーラシア東部の大帝国へと発展させることを可能にした清朝皇帝が持つ王権の要素について、特に以下の意見を取り上げる。まず岡田英弘氏は、清朝のルーツは元朝で、モンゴル大ハーンの継承が清朝皇帝の根拠であったため、帝国の発展はモンゴル大ハーンの性質によるものとしている。楠木賢道氏は、満洲社会における八旗とはそれぞれ独立した集団であり、清朝皇帝もその2、3の集団の長に過ぎず、それゆえ清朝は隣接するモンゴル諸族、特にホルチン部と婚姻関係を構築し、モンゴル諸族の支配者になったことが帝国発展の原動力になったとしている。さらに石濱裕美子氏は、清朝のユーラシア東部での影響力とは、清朝皇帝が、文殊菩薩の化身や仏教を護持する転輪聖王として認められるというような、いわゆるチベット仏教の保護者・施主としてチベット仏教世界の枠組みに入ったことが大きな要因であったとしている。

ここで、清朝とジュンガルの戦いは、モンゴル諸族の支配者という要素や、チベット仏教の保護者・大施主という要素に抵触しなかったのかという疑問が生じる。確かに、ジュンガルは、元来チンギス・ハーンの血を引く部族と敵対関係にあったモンゴル部族であった。ただ、チベット仏教の保護者・大施主という意味ではダライラマ政権成立の立役者でもあった。そこで、清朝

とジュンガルの戦いが、チベット仏教の保護者同士の戦いという意味を持つ点に注意し、清朝がこの矛盾を如何にして乗り越えたかを考察していく。

## 1. 康熙帝による五台山の改革

康熙帝は生涯の内、1683年に2回、1698年、1702年、1710年の計5回、五台山を巡幸したとされ、その際に多くの寺院の修復を指示し、これ以外の年も使者を派遣しては莫大な布施を行った。1683年には、康熙帝自ら「御製五頂碑文」を作成し、修復した寺の内の16箇寺に送った。「御製五頂碑文」は『清涼山志』中にあり、「御碑後跋」「御製清涼山志序」も含めて、当時の五台山の様相および康熙帝が五台山をどのように把握していたかが読み取れる。

史料によれば、山は五頂に分れ、その中に台懷があり、多くの寺院がある。風が強く高台で寒く、暗い岩は氷結し、夏でも積雪が留まる地であることが「清涼」の由来といわれている。清朝は最初期よりチベット仏教を重んじ、五台山の中心にもチベット仏教僧を据えた。そして、特に注目すべきは「我世祖章皇帝、上爲慈闈祝釐、下爲蒼生錫福、賜金遣使、屢沛恩施。〔『清涼山志』卷首 三 康熙序〕」であり、世祖章皇帝(康熙帝の前の皇帝である順治帝)が、五台山を上は慈闈(順治帝の母親である孝荘文皇太后)の爲に祝釐し、下は蒼生(庶民)の爲に錫福することを目的に礼拝していたということである。

『清涼山新志』には、清朝が五台山に送った布施や祈願の内容等が年代順に記されている。中でも目につくのは「修建」の指示であり、祈願はもっぱら「太皇太后」の長寿を目的にしていた点である(「康熙二十二年二月、聖駕臨山各寺、發金、特命修建。上祝太皇太后延壽無疆……」『清涼山新志』卷之三 十八 崇建 清)。そして、康熙帝の「太皇太后」すなわち孝荘文太皇太后に対する、いわゆる「萬壽無疆」祈願は、「御製五頂碑文」の随所で見受けられ、ここから康熙帝の五台山信仰が、順治帝の「上爲慈闈祝釐、下爲蒼生錫福」の踏襲であったことが読み取れる。順治帝と康熙帝の五台山礼拝の最大の目的ともいえる「萬壽無疆」祈願の対象とされていた孝荘文太后とはどのような人物であったか。

## 2. 康熙帝の五台山礼拝における太皇太后の影響

孝荘文太后は、モンゴル・ホルチン部の出身で、清朝皇帝ホンタイジの側

妃となった人物である。子の順治帝（即位年齢6歳）、孫の康熙帝（即位年齢8歳）の2代の幼帝を後見し、帝国発展の陰の功労者ともいわれている。ホルチン部とは、現在の黒龍江省と吉林省を貫く嫩江流域に遊牧していたモンゴル部族で、チンギス・ハーンの次弟ジョチ・ハサルの末裔が率いていた。清朝とは重層的な婚姻関係を結び、最も忠実な盟友として清朝最初期を支えたといわれている。清朝におけるホルチン部の地位は非常に高く、その要因としては、ホルチン部の首長の一人マングスの娘（孝端文皇后）とマングスの長子の娘が清朝皇帝ホンタイジに嫁ぎ、後者は順治帝の生母となり孝荘文皇太后となったこと等があげられる。以上のことから、康熙帝にとっての五台山は、少なくともその始まりは、清朝最初期の盟友モンゴル・ホルチン部の影響下で信仰されたチベット仏教による孝荘文太后の「萬壽無疆」祈願の場所ではなかったかと推察される。

### 3. 五台山に導かれる「文殊菩薩」の化身

孝荘文太后が1687年に没した後は、モンゴル僧ジェブツンダムパが、康熙帝にとっての良きチベット仏教の導き手となったかと思われる。ジェブツンダムパは、モンゴル・ハルハ部の高僧であり、モンゴルで最も有名で多くのモンゴル人に崇拜されていた僧である。康熙帝とは、1691年のドローン・ノールの会盟でハルハ部が清朝に帰属した時に関係が生じたとされる。2人は非常に親しい間柄であったと伝えられ、『ジェブツンダムパ伝』にはその様子が詳細に記されている。1698年、康熙帝は3回目の五台山巡幸を行うが、その時はジェブツンダムパも一緒に五台山に入山している。そして、五台山で康熙帝の妃等に灌頂を授けたとされる。

ジェブツンダムパは、チンギス・ハーン直系の血を引くハルハ部の雄トシェート・ハーンの息子であった。さらに、チベットではジャムヤン・トゥルクすなわち「文殊菩薩の化身」とも呼ばれていた。康熙帝を含めた清朝皇帝も、チベットやモンゴルでは「文殊皇帝」と呼ばれていたことは多くの史料に散見される。つまり、当時「文殊菩薩の化身」として認識されていたジェブツンダムパと康熙帝が、揃って「文殊菩薩の住む地」とされる五台山を巡幸したことは、何か特別な意味があったのではないかと思われるのである。

## まとめ

「清朝の対モンゴル政策」の観点からいえば、康熙帝にとっての五台山とは、モンゴルとの宥和の拠点であり、五台山を改革することは、モンゴル諸族との相関関係の整備に他ならなかったとも解釈される。モンゴル人、満洲人共通の信仰対象であったチベット仏教がそのことを可能にし、チベット仏教がいわゆる国家祭祀として清朝に取り入れられた根拠としては、ホルチン部出身の孝荘文太后の存在があげられ、清朝の五台山信仰も構造的に孝荘文太后を頂点にして確立していた。

康熙帝とジェブツンダムパの関係構築の意義とは、「モンゴル諸族との相関関係の整備」の観点からいえば、チンギス・ハーン直系の血を引くハルハ部と、チンギスの次弟系のホルチン部の要素を具えた清朝が、「文殊菩薩」の名のもと一つになり、まったく別の血筋をもつモンゴル部族ジュンガルと相対する正当性を見出したということでもある。

康熙帝の五台山改革からは、対モンゴル政策の要ともいえる皇帝像の形成過程が見て取れ、そしてこれを機に、清朝は一中華王朝からユーラシア東部の大帝国へと躍進を遂げていったのかと思われる。

## 史料・文献

『清涼山志』（乾隆二十年重刊本・民国郭恕君鉛印本・民国二二年蘇州弘化社鉛印本）

→杜潔祥 主編『中國佛寺史志彙刊』（第2輯第29冊 228・229、明文書局、1980）

『清涼山新志』（老藏丹巴重編 康熙四十年武英殿刊本）

→杜潔祥 主編『中國佛寺史志彙刊』（第3輯第30冊、丹青圖書、1985）

『ジェブツンダムパ伝』

blo bzang 'phrin las, dza ya paNDita (1642-1708). *sh'a kya'i btsun pa blo bzang 'phrin las kyi zab pa dang rgya che ba'i dam pa'i chos kyi thob yig gsal ba'i me long*. 1702. Reproduced in the Collected Works of

Jaya paNDita blo bzang 'phrin las. ŚATA-PIṬAKA SERIES, vol.281. New Delhi.

日比野丈夫／小野勝年『五台山』（東洋文庫593、平凡社、1995）

岡田英弘編『清朝とは何か』（藤原書店、2009）

楠木賢道『清初対モンゴル政策史の研究』（汲古書院、2009）

石濱裕美子『チベット仏教世界の歴史的研究』（東方書店、2001）